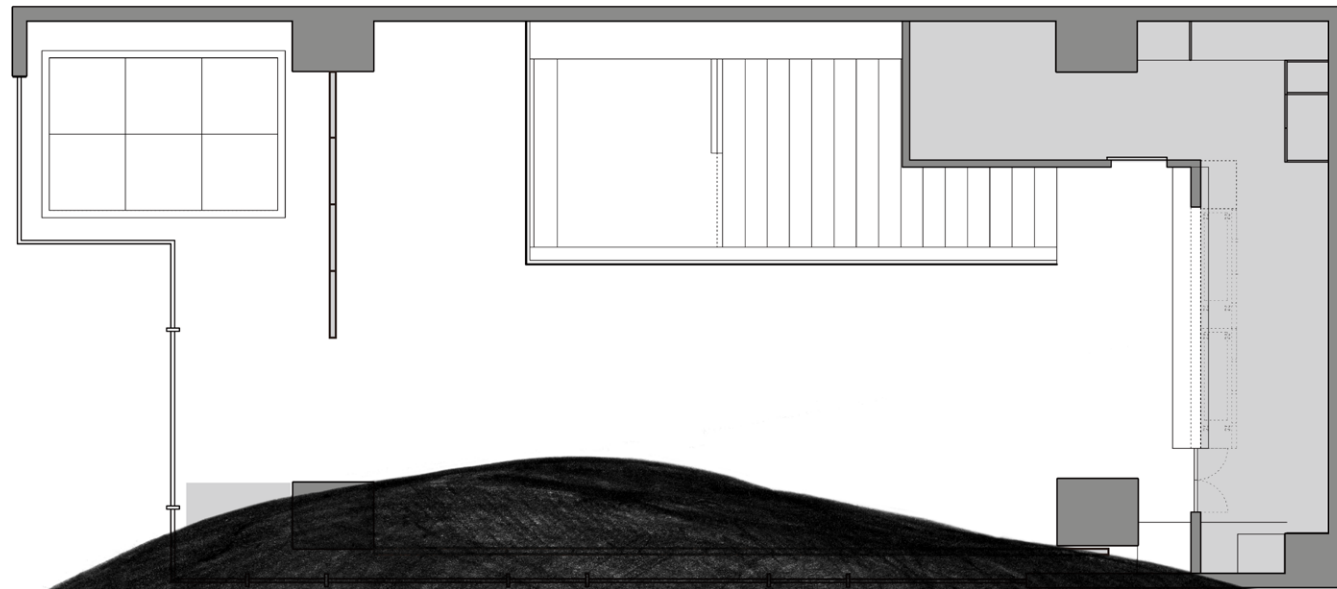




[グチック考]

私は大学在学中より、いわゆる絵画的要素の一つである情緒的な色彩の駆け引きよりも、「形象」に着目し、それらによって導かれる、ある種の道理を探すようなものとして制作を位置づけてきました。例えば我々の身体が皆似たようなスケールとバランスで頭と胴体と四肢に構成され、5本の指があること、あるいは大陸の地形が、凹凸の1つまで緻密に定まっていること、またあるいは過去の全ての出来事が変えようのない事実で累積し、常に結果としての現在へと繋がっていること、その他のあらゆることが、「他であったかもしれない可能性」を排除したうえで、我々の意思や希望に関わらずドラスティックに決定され、存在しているという事実。

そのような、普遍的形象を暴き出す手段として紙へのドローイングを重ねていたあるとき、一枚の枠内に収まりきれず描かれたカタチが、枠の外にある何か大きなものの一部分であるかのように見え、そこから続きの形を追いかけて、支持体となる紙を継ぎ足していくスタイルが生まれました。

そうして、発掘作業のような描画の果てに出現した"それ"は、絵画空間に描かれた完全なイリュージョンとも、平らな物体ともつかぬ、まったく別の空間にある巨大な量塊の、紙の上に投げられた影法師のような存在に見て取れました。

また"それ"は、ある種の偏りをもつ形の繰り返し、ほぼ明確な輪郭を成していることに加えて、シルエットの内側は黒く抜けており、無限の不確定要素を孕んでいること、全体の像ではなく、常に断片的な部分のみが表れていることから、即ち我々が認識している"この世界"の有り様、またはその関係性を、そのままに具現化しているもののように思われました。

「グチック」とは友人が私の作品をさして言った造語で、その音をもつ印象が、描かれるカタチの特性と合致しているように思われるところから、既成の単語を当てはめるのではなく仮にそう呼ぶこととしています。

グチックが、実在しない虚の量塊であること、それが二次元の描画によって発露してきたことなどから、グチック考におけるいずれの展示においても直に目視できる立体像を展示するということではなく、観者の認識世界に巨大な立体が立ち上がることを目論んでいます。さらには、ギャラリーの周囲や市街に出現するグチックのイメージを、写真や会場平面図に直接描き込んだデジタルプリントやドローイングとして併置し、会場内に突き出た断片と、外側に広がる巨大な存在が複合的に認識されるような表現を試みています。

実空間にモチーフを立体造形したものが、再現された模造品であるのに対し、錯視により見えない部分を補って出現するイメージや絵画空間におけるそれは、観者の認識世界で物理的な制約をうけず、あるいは無限のボリュームも想定可能な虚の存在として、逆説的にリアリティを獲得するのではないかと考えられます。







グチックの一部がギャラリー内に入り込んでいる想定の実装。グチックは幻の量塊であるため、実際は壁と床が黒く塗られているのみで、物理的なボリュームは実在しない。



ギャラリーの外側にあるグチックの姿を、録画した実際の風景と合成した映像。グチックは可能性のカタチであるため、目に見えない遅さでカタチが変化していく。

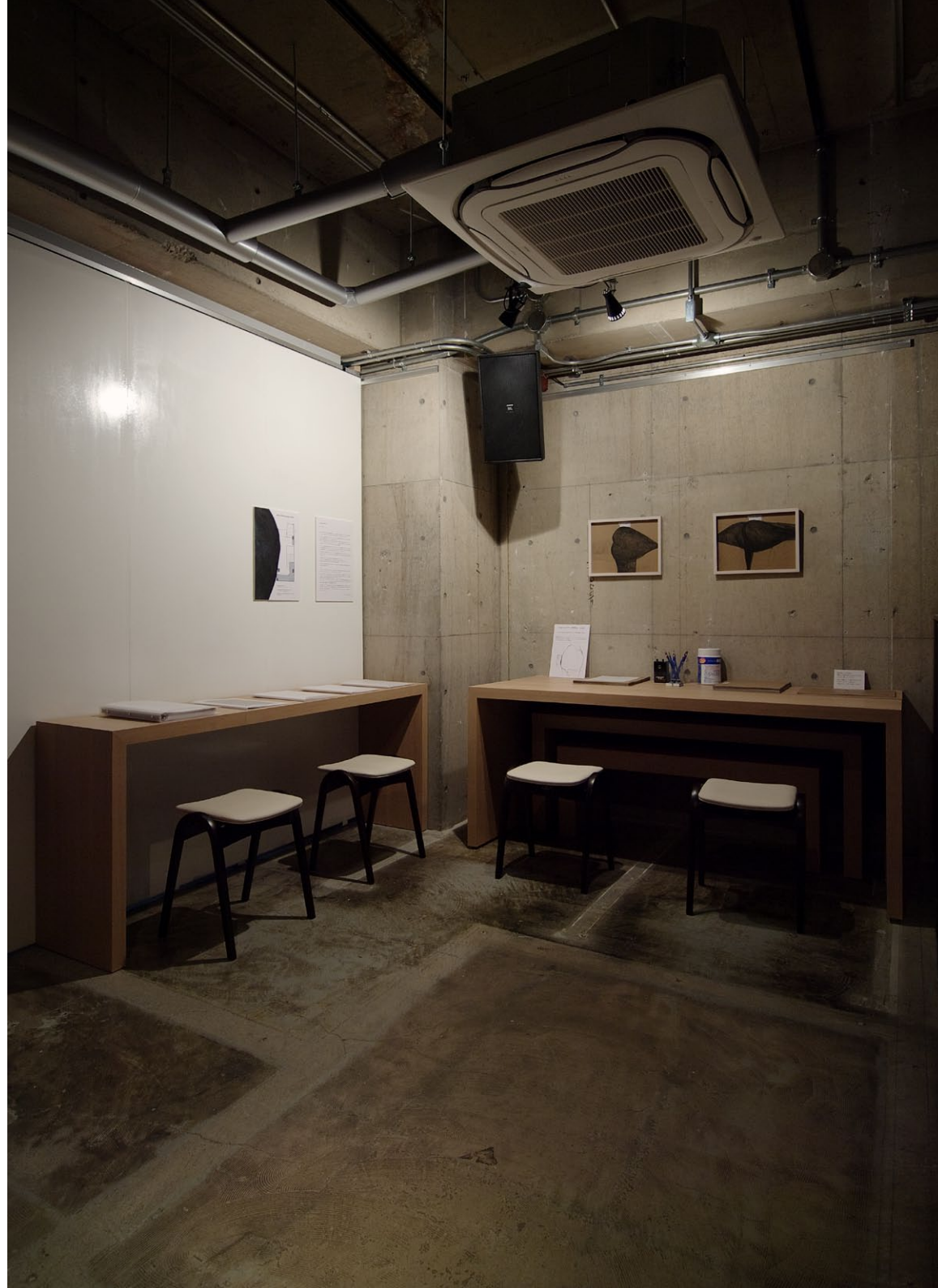
[ドローイング コラボレーション]

GUTIC STUDY @Gallery PARC では、グチックの断片を呈示するインスタレーションと、ギャラリーの外にあるカタチを探すドローイング、映像プロジェクションに加え、観客参加型のドローイングコーナーが設置された。

来廊された方々に、ギャラリー内の断片に続く外側のカタチを描いてもらい、後に、本人同意の上で山岡がそれを上描きして完成させる。

全く別の個性によって描かれた、グチックとは異なるカタチから、山岡の手によるグチックのカタチへと、ギリギリのところまで引き戻す作業を通して、従来では描き得なかったような、新種、変種ともいうべきグチックの姿が立ち現れてきた。

撮影：草木貴照







Drawings by Visitors 2011 28.8 × 37.9 (cm) ボール紙に鉛筆





Collaborative Drawings 2011 28.8 × 37.9 (cm) ポール紙に鉛筆